
ブルー・アイリス

青龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブルー・アイリス

【Nコード】

N8750Y

【作者名】

青龍

【あらすじ】

俺こと達哉は、科学と魔法が発達した壁に覆われた世界でぬるま湯のような平和に浸っていた。だからだろうあんなゲームに手を出したのは…。

現実とゲームの壁は混ざりあいやがて逆転していく。

こんな俺にも何か出来ることはあるのだろうか。

解説1 (前書き)

中学時代に書いてたやつを見てみるとひどいもんですね。

ちよつと手を加えるだけのつもりがかなり変わってしまった。

面白くなるようこれからバンバン書き直します！

見てって下さいね？

解説 1

ブルー・アイリス ワード

如月 達哉 (15才) 男

171cm 48kg

過去の事故の影響で右目に魔術具を持つ。グループの突っ込み担当。

氷の刀使いで能力を使っている時だけ右目が青くなる。

毒舌だが人には好かれる。使用魔術具

氷不死鳥の核

氷凰

新島 椿 (16才) 男

169cm 56kg

達哉の親友。グループの突っ込み担当。

エレベーター式のマジックスクールに小2の時に転入してきた。

達哉と対をなすDSである。紅蓮の瞳を持つ火の双剣使い。

使用魔術具

火龍の双牙

龍の腕紐

有馬 悠 (16才) 男

174cm 61kg

頭が良く、作戦立案者。グループの盛り上げ担当で、人気者。元ボクシング部所属の地の手甲使い。

使用魔術具

巨人の腕

泥作りの首飾り

坂神 文弥 (16才) 男

163cm 43kg

グループの盛り上げ担当。医者の子息のだが、その生まれを嫌っている。

風の鞭使い。

使用魔術具

天馬の尾

天馬の翼

平山 隼斗 (16才) 男

165cm 52kg

ビビリで、後衛専門のぼっちゃり。

グループのいじられ担当。オタクに向かってまっしぐらな、無使い。

使用魔術具

無の象徴

逃げの足輪

安藤 美紀 (16才) 女

167cm 42kg

男っぽい性格。

グループのまとめ担当で男子は逃げぎみだがわりと美人。

ぬいぐるみを集めるのが趣味という乙女チックな一面もある。

雷の護符使い。

使用魔術具

雷の紙束

信号首輪

早崎 鏡花 (15才) 女

161cm 40kg

達哉の右目の秘密を家族以外で唯一知っている人物。グループの癒し担当。

達哉の幼なじみでのほほんとしているためいつも達哉にいじられている。

水の杖使い。

使用魔術具

水柱の杖

結ぶ指輪

如月 瑠美 (14才) 女

152cm 38kg

多少ブラコン入った、達哉の妹。

マジックスクールの中等部に在籍している。

来年高考部に入學してくる光使い。

使用魔術具

天使の翼

エンジェル・リング

解説

達哉たちの通う学校

大日本マジックスクール

生徒数5000人以上の小中高一貫校。

達哉たち7人は高等部の1年、瑠美は中等部の3年。

魔術具

モンスターが死んだ後、残された素材を使って作ったアイテムのこと。

武器として使うウェポン系と、一般家庭で使うためのローカル系が

ある。

属性

火、水、雷、風、地、木、光、闇、無があり、派生してさらに多くなる。

基本は一人一種類持つ。

この世界は科学と魔法、相入れないはずの二つが混合している。

町の外にはたくさんのモンスター達が徘徊しているため常に危険地帯と化している。科学と魔法の力で守られている主人公達はある最先端オンラインゲームを見つけ興味本意で始めてしまう…。

ゲームの世界は4つの界で出来ており、人が住む現界（火、木）、その下の下界（闇、地）、現界の上にある空界（風、雷）、一番上にある天界（光、水）がある。

属性、アバター、町や町の外のグラフィックはほぼ完全に現実世界と同じに出来ている。

解説1（後書き）

今回はワードだけです。

次回から本編です。

あからさまな敵役や、声だけのうざーい女の子も出ますが見てって下さいね？

現実（前書き）

いつも通りの日常と、ほんの少しの非日常

現実

保健室

部屋の外から響く喧騒と雄叫びで目が覚める。

俺こと如月達哉は保健室のベッドから身を起こすとぐっ、と伸びをした。特に体調が悪いわけではない。ただのサボりだ。すると、

「達哉〜」

カーテンの向こうから聞いたとたん眠くなるような間延びした声の主がトコトコと歩いてきた。

「鏡花か？」

「そうだよ〜」

カーテンの間隙から少し幼い少女の顔がひよっこりと現れる。

このポワンとした少女は、俺の幼なじみの早崎鏡花。どちらかと言うと遅崎だと思うのだがそれは胸の内にとまっている。

「もうすぐ決勝戦が始まるよ〜」

早く起きないとみ〜ちゃんたちにおいて行かれるよ〜」み〜ちゃんたち、とは達哉や鏡花が普段一緒にいるグループの一人だ。

新島椿、有馬悠、坂神文弥、安藤美紀、平山隼斗の5人、全員で7人だ。小学生の頃から大体このメンバーで一緒にいることが多く、互いのことを下手をすれば親よりも理解している。

「達哉が来ないと私がみ〜ちゃんに怒られるんだよ〜」

鏡花が情けない顔で腕を引っ張ってきた。

鏡花は昔から達哉以外の友人には「〜ちゃん」を付ける癖がある。

「ハイハイ、わかったよ〜」しびしびベッドから出て、歩き出す。

「あつ、待つてよ〜」

鏡花がトコトコと一生懸命についてくる。なんとさえいいか鏡花は（外見以外は）高校生より小学生に近い。中身が成長していないだけかも知れないが…。

結局、鏡花の速度にあわせて横を歩く。
横目で鏡花を見るとこちらを見ながらニコニコしていた。

移動

「ようやく来たか。サボり魔め」

「ずいぶんなごあいさつだな、美紀」

「ふんっ」

と、そっぽを向いてしまふみくちゃんこと安藤美紀。

「まあまあ。とりあえず不戦敗にならなかつただけいいじゃん。ねっ？」

明らかにご機嫌伺いをしているのが分かるビビリ隼斗の言い回しに美紀はさらに怒りだす。

5人は安全地帯まで避難してから、決勝戦の作戦を立てる。
もちろん、たびたび聞こえてくる悲鳴はスルー。

「今回は誰が前衛に行く？」

達哉が椿に話かけると

「…俺が行く」

と、殺気のコもった声で悠が言った。

「…何があった？」

向かいにいる椿に聞くと、

「それが…」

30分前

椿、悠、隼斗が会場に向かって廊下を歩いていると、

「またお前らかよ」

少し長めの髪をかき上げながら歩いてくる影があった。

「……ん？」「……」

三人一斉に同じ反応をする。

向かいに立っていたのは今回の相手、流生率いるグループだった。
「こっちのセリフだ」

椿が鬱陶しそうに答える。

流生のグループは毎回トーナメントに出て、毎回達哉たちに負けているグループだ。

「けっ、いつもいつも邪魔なんだよー!」

「んだとトカゲ顔!」

「なっ!言つてはならないことを…」

椿のトラウマ級の発言に流生が怯む。

「そ、それより。毎回トーナメントに出て毎回俺たちが負けるなんてな。どんなイカサマ使っているのか知りたいもんだ」

この流生の言葉に、

プチンっ

と、何かが切れる音がした。

「……………殺す」

「へっ?」

悠はそう言い残して歩いていった。

回想終わり

「と、言う事があった」

椿が淡々と言った。

「んじゃ悠に前衛やつてもらおう」

悠の怒りに巻き込まれるのはゴメンだと、文弥が聞こえないように付け足す。

「友達想いだね」

鏡花がゆる〜く締めくくる。

「決まったみたいだな」

すっかりした顔の美紀が近付いてきて言った。尊い犠牲のもとに危険は去ったのだろう。

「おう。じゃあ、行くか」

達哉が歩き出し、みながそれに続いた。

「ねえ、はぐちゃんは どうするの?」

鏡花が美紀に聞くと

「紐でもくくり着けて引っ張ってけばいいじゃない」

「あはは…」

もはや笑うしかなかった。

決勝戦

広いドーム状の模擬戦ホールで達哉たち7人と流生率いる10人が向かい合っていた。緊張感がひしひしと伝わってくる。

審判役の教師が台に上り…

『レディー・ゴー!!』

大声と共に開始のブザーがなる。

「うおっしゃー、いくぞイカサマ野郎ども!」

「…やっぱ殺す」

こうして決勝戦は始まった。

みんなあー、いきなりの展開に押し流されてしまいそうだからあー、ちよー簡単な説明をしておきますねえー

え?お前は誰かって?それはまだまだ秘密ですっ!

コホンッ、私の事はベルちゃんと呼んで下さいねー ベルたんでも、ベルたまで、お好きな用に呼んで下さいーい

え?お前なんか興味ないからバトル見せろって?とっとなと失せろっ

て？やだなーブチコロシマスヨー

…うん静かになつたね

おっといけない説明説明つと

今皆が見たがっているのは大日本マジックスクール伝統行事、『統一祭』って言うんですよ 春夏秋冬、年に四回のバトルリーグですマジックスクールって言うのは、『魔法使い』を作る学校で、統一祭がその頂点を決めるトーナメントって感じですよ 説明はこんなもんかな？

それじゃ、バイ

今日の達哉たちはいつもと違っていた。何が違うかと言われたら全体的に違っていた。

いつもなら互いをフォーロー出来るようにするのだが…。

「殺す殺すコロスコロスコロスコロス」

悠が恐かった。

「な、なあ悠やばくないか？」

文弥がちよつと引き気味に訪ねる。

「うーん、出来るだけフォーローするしかないね」

「ったくあの馬鹿」

鏡花と美紀もあきれ気味だ。

フォーメーションもいつもと違い前衛が悠一人、あと全員が後衛になっている。6人の前では悠がバーサーカーのごとく戦っている。

「た、助けてえ〜！！」

「ヒイイ、来るなア〜！！」

……………。

6人は心の中で『御愁傷様』と手を合わせた。

『優勝は達哉グループです！』

文弥の部屋

場所が変わって文弥の部屋。マジックスクールの生徒は全員寮生活している。

大抵みんなが集まる時は、文弥の部屋に行く。家具は少ないが決して寂しい感はなく、少ない分広いのだ。まあ、7人入れれば手狭になっってしまうが。

「いやー、今回も楽勝だったな」

「ストレスは発散できたか？」

「ああ、ばっちりだ」

「怪我なくて良かったよね」

「怪我したらお前が治してくれるんだろ？」

「あいつの火は弱すぎる」「えー強いんじゃないん」

文弥、美紀、悠、鏡花、達哉、椿、隼斗の順で言う。一緒にいても必ず同じ話題で話す訳ではない。

「次のトーナメントもらくしよ……」

そこで文弥の声が途切れた。

ウーウーウーウーウー赤いランプと非常警報が鳴り響く。

「非常警報……！ モンスターか!？」

「くそつ。とりあえずロビーに行くぞ!！」

美紀に促されて皆部屋から走り出た。

寮のロビー

ロビーは混乱した生徒で一杯になっていた。それも当たり前だろう。非常警報には3つの種類があり、

青色…街にモンスター出現黄色…学校周辺に出現

赤色…学校内に出現

と、なる。

赤いランプとはつまり、学校内、および寮内にモンスターが出現したことを示す。

達哉たちはロビーにある大型モニターに目を向ける。

『警戒レベル、レッド。』

侵入モンスターは2体

見つけた者はモンスターを討伐するように』

とだけ、記されていた。

「くっそ。投げやりだな教師ども！」

椿が毒づく。

「そんなこといいから早くいくぞ！」

美紀が喝を入れて、皆走り出す。

現実（後書き）

バッサリカットです。

なんのことかわかりますよね？

ハイ、その通り髪の毛ではありません。
バトルです。

バトルあったのにバトルシーン一切無しです。

なんかすみません。

次から頑張ります。

非日常（前書き）

バトルとお仕置きと再会

非日常

マジックスクール

達哉たちは寮から移動し学校の廊下を北に向かって走っていた。理由は簡単、校内にモンスターが確認されたためである。

マジックスクールでは基本的に、学校の内外に出現したモンスターの討伐を生徒に任せている。これも訓練らしい。

「3つ先を右折した所に1体いる！」

文弥が低級の探索魔法【エンカウト1】で早くも1体の居場所を見つけ出した。

「っし、急ぐぞ！」

樁が先頭に立ち角を右に曲がる。

その先には大きな「何か」がいた。

全身を緑色の鱗に覆われている様はトカゲのようだが、体を起こして二足歩行をし、さらには右手に湾刀、左手に円形盾を持った姿は人間らしささえうかがわせる。RPGゲームで言えばリザードマンといったところだろう。

「よしっ、さっさと切り捨てて次行こうぜ」

腰の左右に吊つてある双剣「龍牙」を抜き放ち、今にも駆け出そうとする樁を珍しく鏡花が引き止める。

「まっ、待って！相手は本物だよ？危ないよ」

自分が怪我を、下手をすれば死ぬかも知れない状況でも樁の事を心から心配できる。こいつのこういった心からの優しさが人を惹き付けるのだらう。俺もその1人であることは否定しない。

「その通りだな。俺、樁、悠の3人で壁役、他のやつもいるかもしれないから皆は周囲を警戒。同時に俺らのサポートもしてくれ。出来るか？」

達哉が皆に指示を出しながら腰の刀「氷凰」を抜く。

「ふんっ、当たったり前でしょ」
美紀がいつも通りに返す。と、ようやくリザードマン（仮）がこちらに気付く。

「気付かれた！行くぞ！！」
椿の掛け声で一斉に走り出した。

余計な補足になってしまいが、ここマジックスクールでは校内での武具の所持は校則で禁止されている。今回は非常事態とあって全面解放になっている。

「うりゃっ！！」

籠手「岩手甲」をはめた悠がわざと盾に攻撃を与えリザードマン（仮）の体勢を崩すと、

ヒュッ！！

ズババツ！！

達哉が右から、椿が左から急所を的確に切り裂いていく。

「ウジャヤヤヤッ！」

悲鳴だかなんだかよくわからない声を出しながらリザードマン（仮）が仰向けに倒れる。

「ふう、ざつとこんなもんかな」

双剣を腰に戻しながら呟く。

「おつかれさん」

「お疲れさま」

文弥と鏡花がねぎらいの言葉をかける。

「あと1体だ。早く次に行こうぜ？」

モンスターを倒した数だけ成績にプラス点がつくため成績のよろしくない文弥や隼斗が皆を急かす。

「そんなに急がなくても大丈夫よ」

唐突に美紀が口を挟んでくる。

皆の頭の上に？マークが浮いている。

「だって…」

達哉たちの後ろの通路の角をカード型魔術具、「雷束花」で指差しながら言う。

「向こうから来てくれたもの」

途端達哉たちの頭上を5本の雷が走っていく。美紀の雷角【エレジヤ4】だ。

「うおわっ!!」

悠が変な悲鳴をあげながら頭を下げる。

「あつぶねえなあ、大体なにが…」

椿が悪態を吐きながら振り向く。

なんかデカイのがいた。

先ほど倒したりザードマン（仮）の約3倍、5メートルはあると思われるリザードマン（大）が達哉たちを見下ろしていた。

「なあ、これってありなのか？」

「あり、なんじゃね？」

椿が首を傾げ達哉が無意識のうちに返す。

「ぼさつとしてないでさっさと準備しなさいっ」

「は、はいっ！」

美紀の怒鳴り声で覚醒した6人は一斉に武器を掲げる。

今のところ戦況はあまり良くない。先ほど倒した（仮）よりも攻撃や守備の範囲が広く、なかなか攻撃が届かないのだ。どうしたものかと達哉が歯噛みしていると

「達哉っ！来い！」

前方にいた悠がアイコンタクトと同時に叫んできた。

両手で握っていた刀をゆるりと右手に持ちかえ悠の背中へ駆け出す。

（重要なのはタイミングだ）悠の背中が近づいてくる。3…

意識が加速していく。

2…

（大）の振り上げていた湾刀が止まる。誰かが魔法をぶつけたのだろう。

1…

（ここだ！）

悠の背中を踏み代替わりにして大きく飛ぶ。だらりと下げていた刀を右下から一気に切り上げる。硬直から立ち直った（大）も意外なスピードで的確に防御してくる。

（そう、それでいい！）

切り上げた刀を素早く反転、峰に持ちかえ薙ぐ。

ガツギイイツ

（大）の構えていた盾の小さな窪みに刀をひっかけて力任せに横へ弾く。

（これで…）

その奥に見えたのは生物の弱点の1つ、喉だった。薙いだ刀を引き戻し腰ために構える。

（終わりだ！）

そのまま首もとに深々と刀を突き刺す。

「ゴ…ルアア…」

一撃で即死したりザードマン（大）はうつ伏せに倒れる。

ドオオオン

グチユツ

2つの音が同時に響いた。

「達哉あゝ！」

鏡花が急いで走りよる。倒れる瞬間達哉は刀を抜こうとしていた。つまり…

（達哉が…下敷きにつ）

美紀は動けなかった。

嫌嘘幻夢嫌嘘幻夢嫌嘘幻夢……………。

まるで呪文のように同じ言葉が頭の中をぐるぐると回っている。

「ぼさつとしてないで早く手を貸せよ！」

椿が偶然にも先ほどの美紀と同じ台詞で怒鳴ってきた。

「うあ…あ。死ん…だ？」

それでも美紀は立ち尽くしていた。

「おいおい、勝手に殺してやるなよ」

文弥が後ろから声をかけてくる。

なにを言っているのだろうか？あれだけ派手に出血しては命が助かるはずがない。いくらなんでも無理がありすぎる。血溜まりどころか本当に血の海になっているのに…？

そこで気付いた。さっきからずーっと気になってはいた。音だ。

何かを削っているかのような、ガリガリッ、ガリガリッという不快な音が聞こえる。

「あ、あんたまさか…」

呆然としながら隣の文弥を睨み付ける。

「せーかい」

笑いを堪えながら答える。「回転する盾【スラスラスト5】だよ」直後リザードマン（大）の体が内側から弾けとんだ。

仙日市

モンスター騒動を終わらせた7人は足早に学校を出た。もちろん教師からのありがたーいお小言から逃げるためだ。討伐したはいいが廊下は今や大惨事である。

あの後、なにも言わなかった文弥と達哉を5人が許すはずもなく、椿と悠にボコされ、隼斗にネチネチ小言をいわれ、美紀は顔を鬼の形相に変えて怒っていた。さらには鏡花が泣き出す始末。「皆が騒いでて言い出せなかった」と、言い訳じみた反論も聞いてもらえるはずもなく、これから夕飯を奢らされる事になった。「はあ…」「」

二人のため息が重なる。肩を落としながらとぼとぼ歩く二人だった。

「まだ足らんなあ」

悠が店の戸をくぐりながら呟く。

「ちょ、マジこれ以上は勘弁っ」

「じょーだんだよ」

慌てる文弥の頭を掴みながら椿が後に続く。

「なあ、ちよつとゲー爺んとこ寄っていいか？」

「なにそれ？まあ、時間にも余裕あるし構わないわよ」

中古専門店 ジジイ屋

「酷いネーミングセンスだね」

隼斗が啞然としながら言う。

「品揃えは悪くないぞ」

達哉が即座にフォローする。

自動ではないドアを開け店内へ入る。中古のゲームやコミック、DVDがずらりと並んでいる。達哉は一目散にゲームが並ぶコーナーに。

「よお、ゲー爺」

「お、久しぶりじゃないか。元気にしとったか？」

「おう、ぼちぼちな。ゲー爺も元気そうで何より」

「世辞はいらんよ」

二カツ、つと笑いこちらに向き直る。身長は150ほど、かなり痩せているが表情で健康なのは分かる。

「出来るだけ新しく、面白そうなのねえかな？」

「おお、あるとも」

二人の会話に付いていけないその他大勢。

10分後持ってきたのは『8個』のパッケージと『8個』のマシンだった。

「ん？俺ら7人だぞ？やっぱボケてやがんのか？」

「ボケとらん。初めての顔が6つに久しい顔が2つ。合計で8つだ」
久しい顔が2つ？どういう…。

すると突然後ろから何かが覆い被さってきた。

「うわっ、なんだよ！」

急いで振り払う。

「いったー、達兄いひどー、妹不孝者ー」

「そのめちやくちな物言いは…」

おそるおそる振り返ると、「久しぶり、お兄ちゃん」

達哉の妹、瑠美がそこにいた。

非日常（後書き）

初めてのバトルシーンですはい。

上手く書けてるでしょうか？自信が無いです。

とりあえず主要メンバーは出揃いました。

今回はゲーム、つまり仮想世界でのお話がメインになると思います。
これからも頑張ります。

妹想いのお兄ちゃん？（前書き）

再会 怒り 憂鬱 新世界

妹想いのお兄ちゃん？

ゲー爺の店

達哉は今見ている者が信じられないと言った表情で後ずさる。

「瑠美。な…なんでこんなところに」

思わず疑問を言葉にしてしまう。

「つれないなあ達兄いは。せーっかく可愛い妹が来てあげたのにさ」
瑠美は達哉をつつきながら近寄っていく。

パシッ

その手を美紀がはたき落とす。

「止めなさいよ、嫌がつてるじゃない」

「むっ、そういうあなたは誰ですか？」

少しむくれながら瑠美が問う。

「あ、あたしは…その…。友達？よ」

「何で疑問形なんですかつ」

疑わしそくに聞く。美紀は答えられず口ごもる。

「おい、俺の質問を無視するな」

「あっ、そーだった。皆さん初めまして。達兄いの妹の如月瑠美ですっ。マジックスクール中等部に通うことになりました。どうぞよろしく」

一通りの挨拶を済ませると、達哉の腕に自分の腕を絡ませ引きずっていきこうとする。

「待てよ」

低い、声だった。いつもの達哉からは決して出ないような声。

「俺の質問に答えてないだろ」

「っ…。それは…」

今度は瑠美が口ごもる。

「どうしてこっちに來たんだ。納得できる説明をしてみる」

「私が、来たかったから、だよ?」

「そんなんであいつらが納得するわけないっ!!」

突然の大声に瑠美の肩が跳ねる。長い沈黙の後、

「お父さん達は、何も知らないよ。言わないで、来たの」

わざと主語を省いて答える瑠美。聞かなくとも達哉には何を言わなかったのか、すぐ分かった。

「あいつら、知らないんだな。やっぱり」

口元を歪めながら吐き出す。教えていないのだから当たり前か。

その場にいる誰もが口を開くことを躊躇っていた。たった一人を除いて。

「おい、ここでんな暗い話してんじゃねえよ」

ゲー爺がふざけた様な言い方で咎める。

「…悪い」

「…ごめんなさい」

二人の謝罪を受け、ゲー爺はカラカラ笑いながら店の奥に引っ込んでいった。達哉はその背中を見送ると、皆に向き直り謝罪した。驚いていたようで、揃って反応が鈍かったが。

「すまん、皆は先に帰ってくれないか?」

「ん、わかった。また明日でね」

鏡花が皆の背中を押して店を出る。

(ありがとな)

口には出さず心の中だけで礼を言う。あいつなりに気を使ってくれたのだろう。「…ごめんなさい」

瑠美が服の裾を握りながら謝ってくる。

「はあ、いいよ。もう受かってるんだろ?」

瑠美が頷く。なら仕方ない。もうどうしようもないのだから。ただ…

「俺が学校に居ることは、あいつらに話すなよ」

返事がない。後ろを振り返ると、瑠美は立ったまま夢の世界へ旅立っていた。

相楽市

いま、俺は仙日市の東にある相楽市に来ている。住宅メインの土地だ。普段なら決して近づかないのだが、瑠美が寝てしまったため仕方なく送り届けている最中である。

「はあ……」

ため息を吐くと下がり始めていた瑠美を背負い直す。背中に寝ている女の子を背負い、肩には大きなポストンバック、さらには女物のハンドバッグを持つ高校生の姿は端から見ればかなりシユールな光景だろう。すれ違う人達の視線がやけに痛い。

(どうしたもんかなあ)

はあ、ともう一度ため息を吐く。

(つたく、面倒ごとを増やしやがって。後で覚えとけよゲー爺め)
かれこれ1時間前……

回想

鏡花達が店を出て少したった後、ゲー爺が店の奥からひょっこりと首を出してきた。

「おう、まだ居たな」

「ああ、瑠美が寝ちまったから送り届けなきゃいけないけどな」

そう言っ立ったまま寝ている瑠美を背負うと、回れ右をして店を出……

「ちよつとまで」

「うぐっ」

ようとしていたところを、いつの間にか後ろにいたゲー爺が、服の襟を握って止める。

「ぐっ、げほっげほっ、何すんだっ」

涙目になりながら抗議するも

「止めただけじゃろ」

あつさり流された。

「まだなんかあんのか？」

「ああ、こいつじゃ」

ゲー爺が持っていたのはかなり大きめのポストンバックだ。ゲー爺が丸々一人入れそうな大きさの…

「ばつ、ちよつ、早まんなつて!!」

「なぐにを言つとんじゃお前は」

冷たい目で見られた。

「こいつじゃ、こいつ」

ゲー爺が指差していたのは先程持ってきたゲーム機とソフト。

「おいおい、そんなに買う金なんか持つてねえよ」

少し呆れ気味に言う。パツと見ても何十万かかるか分かったものではない。

「お前さんニユースは見んのか？」

ゲー爺がバックに詰めながら話し掛けてくる。正直ニユースなんていちいち見やしない。ゲー爺もそれが分かっているのだろう、返事を待たずに続ける。

「今世界にはVRWつてもんがあるんじゃ。正式にはバーチャルリ
アリティワールド、仮想現実世界と言う。ここ1、2年の間に出て
きた技術さ」

ゲー爺が得意気に話す。

「で？それがどうしたよ？」

話が見えん。

「お前さん察しが悪いのお。簡単に言えばこいつを使えばどんな世界でも作り放題なんじゃよ。あーんな世界も、こーんな世界も、自由自在にの」

「へえ、それつて結構すげえんじゃねえの？」

驚いた、そんな技術がこの世界にあったのか。

「すげえなんてもんじゃないぞ。ゲームなんかオマケみたいなもんじゃ。本命は軍事や医療、今では一部の教育機関や企業でもこの技

術を取り入れようと動いてるとこも在るぐらいじゃからな。人間にとってではまさに夢の技術って訳じゃ」

全てをバツクに詰め込んだゲー爺がこちらを振り向き、ゲームの入ったバツクを揺らしながら続ける。

「こいつもその一つ。VRWに親しみをもってもらうため、安全性をさらに向上させた民間用のゲームじゃ。ゲーム機もソフトも、全て無料で国民に配られておる。まあ、ほんとに明後日からなんだがな。お前さんは特別じゃ」

そう言っつて大きなポストンバツクを押し付けてくる。「良いのかよ、そんな勝手なことして」

受け取つたはいいものの、一応、念のために確認を取っておく。

「構わん。向こうに知り合いが居るのでな、何とかなる。ああ、一つ忘れとつた」

おもむろに懐から二枚の紙切れを取り出す。

「なんだそれ？チケツト？」

「そうじゃ、『星園 スターガーデンパーク』の前売りチケツト。偶然当たつたんでな、二人で行つてこい」

星園市とは仙日市の北東、相楽市のちょうど北にある、観光地として有名な土地だ。電車で一時間もかからないだろう。さすがにネーミングには引かざるを得ないが…。

二人で、と言うのはつまり俺と瑠美の二人で、つて事だろう。仲直りしろつて事かな？別にケンカした訳じゃ…

「いいな？」

「…はい」

ここまで気い使ってもらつてるんだ。こつ答えるしかないだろうよ。

回想終

そんなことをつらつら考えているうちに目的地が見えてくる。

「おい、瑠美。着いたぞー」

ゆっさゆっさと揺さぶるも効果なし。仕方ない、久しぶりにあれをやるか…。

「おーい、瑠美のケーキも食っちゃまうぞー」

「えっ！待って！」

「ぐはっ」

飛び起きた瑠美のアップアがあとにクリーンヒット。気絶しなかった自分を褒めてやりたい。

「わっ！ごめっ、あれ？ここどこ？」

寝ぼけてんのかよ…。

「家着いたから。早く降りる重うがっ」

後ろからみぞおちに重い一撃。

「なんか言った？」

「なんも言ってねえ…」

怖い妹だ…。

それからゲー爺にもらったゲーム機とソフト、ついでにさっきもらった『星園 スターガーデンパーク』のチケットを見せる。瑠美の食い付き様が半端でなく、「いくいく、絶対いく、明日いくっ！！」とこんな感じだ。さすがに明日は無理だからと説得し、次の週末に行くことになった。

まったく、そんなにはしゃぐ事か？理解できん。

仙日市

翌日の放課後、ゲー爺から預かっていた残りのゲームを配り終わると、満場一致で「いますぐやろう」ということになった。昨日の光景とダブったよ。今回は週末にする必要はないけどな。場所はいつも通り文弥の部屋に決まった。

文弥の部屋

「うし、皆その辺の安定した場所に座るか寝てくれ」文弥が説明書を見ながら指示を出す。

「美紀、ドアのロックは？」

「バツチリ」

「悠、窓は？」

「完璧だ」

「隼斗、エアコンは？」

「タイマーもセツト済み」

「鏡花、電力大丈夫？」

「うん、まだまだ大丈夫そうだよ」

「よし、最後。椿、罨は？」

「侵入者対策は万全だ」

「いや、罨はいらんだろう…」

呆れながら突っ込む達哉。

「なにいつてんだ。ゲームしてる間何が起こるか分かんないんだぞ？」

当たり前前の措置、みたいな顔で椿がのたまう。

「だったらその西洋の拷問具みたいな罨止めるよ。大きな音が鳴ればセキュリティで勝手に目が覚める。ゲーム終わって目の前に死体がある方がビックリだよ」

「ああ、確かにそうか」

驚いた。本気でこのままゲームをするつもりだったらしい。頭が良いのか悪いのか、いまいち判断が出来ない男である。

「さて、準備完了だな」

先程まであったゴツイ罨はどこに消えたのか、今は簡素な防犯ブザーがそこかしこに張り付けてあるだけである。扉や窓を開けると鳴る仕組みだ。

「よし、いっちょやりますか！」

妹想いのお兄ちゃん？（後書き）

いよいよゲームが登場しました

次回は達哉の過去、そしてゲームのお話です

昔と今じゃ大違い(前書き)

昔話 理由 入口 笑い 初体験 まさかの出会い

昔と今じゃ大違い

?????

9年前のあの日、まだ小1だった俺と鏡花が学校で聞き付けた噂を確かめに行こうと思ったのは、ある意味仕方がないのかもしれない。学校から帰り、荷物を整理して町の外れにある森に向かった。誤算だったのは瑠美に見付かったことだ。行きたいと駄々をこねる瑠美を放っておけず、3人で行くことになってしまった。

相楽市 西森

相楽市はもともと森林だったらしいと祖父から聞いていた。その名残としてこの森があるのだ、とも。

『白い死神』

噂はそんな名前で呼ばれていた。よくある怪談話だ。森に入った人間を奥深くに誘い込み、肉体の一部をもぎ取っていく、その幽霊役が白い鎌を持ち、白いローブを羽織る死神に変わっただけ。『白い死神』の名の由来は、言わずとも分かるだろう。

「やっぱり怖いよ〜」

鏡花が情けない声を出す。「うるさいなあ、あんまりうるさいと置いてっちやうぞ」

「お、置いてかないで〜」

もちろん置いていく訳は無いのだが、本気にしたのか俺の左腕にギョツ、つとしがみついてくる。ちなみに、瑠美は森に入ったあたりからずつと右腕にしがみついている。

「怖がりだな、つたく」

と、言いながらも振りほどかなかったのは、俺も不安だったからか

もしれない。

しばらく歩くと目の前に古びた祠があった。

「あ、あそこだよね？」

鏡花の声が震えている。瑠美はただうなずくだけだ。「ん、あれだな。見てみようか」

そう言っつて祠に近付こうとした時

ふわっ

と、風が頬を撫で上げた。まるでなにかが振り上げられたかのような小さな風。「っ!!！」

喉が干上がる。本能的な直感に従って前に転がる。達哉にしがみついていた2人も一緒になつて転がった。

ザクッ

後ろで、何かが地面に突き刺さる音がした。明確な害意と、まとわりつくような殺意。子供の達哉にも今、自分達に危機が迫っている事はわかった。後ろを見ている暇なんかない。

「走るぞ！」

状況の飲み込めていない2人の手をとり闇雲に走り出した。

どこをどう走ったかもわからないほど、無茶苦茶に走り回った。

「こ、ここまでくれば……」

かなり息があがっている。2人は地面に座り込んでいた。

「ど、どうしたの兄ちゃん？」

ある程度回復した瑠美が問いかけてくる。

「え、いや……虫に驚いただけさ」

2人を必要以上不安がらせないように、嘘をつく。確証はない。だ

が、達哉はあれが『白い死神』だと直感していた。

「ふう、そろそろ森出ようか」

体力も回復し、時間も遅くなってきたので立ち上がる。

「う、うん」

鏡花も一緒に立ち上がる。瑠美は達哉の服の袖を掴んでいるだけだ。

「さ、行こう」

3人で手を取り合って森を出た。

残ったのは、達哉の背中についた小さな傷だけだった。

ざわざわわつ、っと風の音が耳元で響いていた。ゆっくりと目を開く。眼前に広がっていたのは、つい数時間前に見た景色。

「ここは…?」

夢を見ているのだろうか？俺、達哉はパジャマ姿のまま、西森の中に立っている。今何時だろう？寝たのが9時頃だから12時あたりだろうか？いつこんな所に来たのだろうか？母さんに怒られないだろうか？いや、これは夢だ。寝惚けていても1人でここまで来れるとは思えない。情けない話だが。

「…も……ぞ」

「？」

何かが聞こえた。霧が出てきたような気がする。

「つ……りを、も……うぞ」

だんだんはつきりしてくる。なぜだろう、異常な程に落ち着いている。

「つづ……つづ……よう……、……ら……ぞ」

うつすらと声の相手が見えてくる。その姿は…

「通行料を、もらっぞ」

『白い死神』だった。

白いローブを身に纏い、白く大きな鎌を持った死神が。

(逃げなきゃっ！！)

一步を踏み出そうとした

「逃げられると、思うか？」

嘲笑うような、声。

動けない。縛られている訳でも無いのに指一本、動かすことが出来ない。

「お前につけた印が、お前をここから逃がさない」

「しるし…？」

死神が後ろに回る。

「この背につけた印が、お前をここに引き寄せた」

見ることは出来ないが背中に傷があるらしい。死神のなぞった跡が痺れるように痛い。

死神は再度前に回る。

『白い死神』をもう一度観察する。白いローブの奥には暗い闇、そして2つの白く濁った瞳。足は無く、鎌は宙に浮いたグローブに握られている。

「さて、貰うとするか？」

「な、なにを？」

「言っただろう。通行料を貰うと」

死神が鎌を大きく振り上げる。動けない俺は、ゆっくりと振り上げられる鎌を見ているしかない。死神の目が笑うように歪んだ。

ドスッ

鎌が深く、突き刺さった。

薄く目を開く。鎌は…

真後ろの木に突き刺さっていた。死神はそんなことを気にする様子もなく、ただ俺の瞳を至近距離でじっ、っと見つめている。逃れたくても逃れられない、絡み付くような視線だった。

「綺麗な、瞳だ」

俺の目を見ながら死神が呟く。意図して言った、と言うより無意識のうちに言ってしまった様な小さな声。「欲しい、その瞳が、欲しい

い

まるで引き寄せられるように死神の左腕が、俺の右目に伸びる。

「や、やめる…」

グ、チュツ

「う、ああああアアア！！」

朦朧としていた意識が覚醒していく。辺りは真っ暗で何も見えない。右目の縁ををなぞるように触る。今、ここにあるのは俺自身の目ではない。俺の目はあの日あの時、死神によって抉られた。そつと、手のひらで右目を覆い過去の残像を消し去る。

ポンツ、と軽い音と共に2つのウィンドウが開かれる。そう、今はゲームの中だ。VRW、仮想現実世界と言う意識のみをゲーム世界に飛ばす、トンデモマシンの初体験中。説明書は読んだが、仕組みはさっぱり分からなかった。題名は

パラレルワールド

（運命の選択）

というらしい。

左側のウィンドウには『貴方をデータ化します。インストールまで2〜3分ほどお待ちください』といった事が書かれている。

右側は『インストールまでにお読みください』と書かれている。

「ま、暇潰しにはなるか」

ウィンドウの右下にある矢印を指で触る。

書かれていたのは『長時間ダイブし過ぎないようにしましょう』『気分が悪くなったらすぐに止めましょう』といったよくある注意事項ばかりだった。

（仮想現実とはいってもやっぱりゲームだな）

特に注意して読むでもなく、ただドラドラと読み進めていく。

説明書によれば、ゲーム内では基本的にダイブした時の服装だが、

服やアクセサリはゲーム内でも購入可能らしい。初ダイブ記念として3つまで服飾品を貰えると書いてあった。

「んー、特に必要無いんだけどな」

とか言いながらもノリノリな俺。時期的に早い(今は6月だ)黒いコート、十字架とハートが組合わさったネックレスを選択した。

「あとひとつ、何がいいか…」

一覧を眺めながら思案する。

「こ、これはっ!?!」

衝撃が走る。なんてものを見付けてしまったんだ…。選ばずにはいられないじゃないか…!

俺は戦慄とともに、嬉々としながら、「それ」をタッチした。

再びポンツ、と軽い音がなりウィンドウが1つに統一され「インストールが完了しました」メッセージが表示される。最後に一行：

『いつてらっしやいませ。もう1つの現実を、お楽しみください』
再び意識が暗転した。

文弥の部屋

目を開く。そこはダイブした時と変わらない文弥の部屋。家具の種類や位置、防犯ブザーもまったく同じだ。

「やっと終わったのか。いつもいつも遅いぞお前は」

「インストールが長かったんだ。俺のせいじゃねえよ」

突っかかってくる美紀に言い返しながら振り向く。

「こっちを見るな!!」

「ゴフウツ!?!」

叫びながらの美紀のハイキックがみぞおちに直撃。俺が何をしたってんだ!?!つつか尖っててめちやくちゃ痛かったんですけど!?!はっ…まさかあいつら…。

今度は先程と変わってゆっくりではなくバツ、っと美紀の姿を確認

する。

「は…あつはははははっ！！」

腹を抱えて笑う俺。そう、今の美紀の姿はいわゆる『女王様』だった。黒いレザーで身を包み、黒い鞭を持っている姿は女王様そのものだ。やべえこいつスッゲー似合う！！何これこんなことがあつていいの！？

「わ、笑うなアホ！！」

少し涙目になりながら怒鳴る美紀。両腕で体を隠しているのがいつにも増して可愛い。

横を見れば椿と文弥も爆笑している。多分用意したのはあの2人だろう。

「ふっ、くく…。そうだった、俺も渡すもんがあるんだ」

さつき選んだ『それ』を美紀に被せる。

「くっ、あはははは！！」

「ふ、ふふふっ」

堪えていた悠と鏡花も吹き出してしまふ。俺が被せたのは最後の1アイテム、レザーキャップだ。

「か、完成した…はっはははは！！」

ヤバイ、これはヤバイ！

「あひゃひゃひゃひゃひゅグブウツ」

「お前は黙れ！！」

隼斗は窓から落ちていった。まあ、ゲーム内だから大丈夫だ、と思いたい。

「くうっ…お前らあ。いい加減に、しろくく！！！！」美紀の怒号が響き渡った。鼓膜が破れるかと思っただけまったく。

「はあっ、はあっ、はあっ」

怒鳴りすぎて息を切らす美紀。せめて怒る前に着替えて欲しかった。また吹いてしまいそうだ。

「まったく…！着替えてくる！！」

パンツ、と勢いよくドアを閉めて出ていく美紀。ゲーム内とはいえ、着替えの際は一瞬ではあるが肌が露出する状態になるらしい。（注意書に書いてあった）

「みくちゃんが帰ってきたら移動しよ〜」

鏡花が半笑いになりながらそう締めくくった。

不機嫌なままの美紀の相手を鏡花に任せ、まずは『ギルド』の場所を探す。今探しているのはNPGという略称で呼ばれる依頼所だ。ノンプレイヤーギルドプレイヤーギルドPGも出来るが、忘れてはいけない。今はまだこのゲームのサービス前なのだ。

「あつた、ここだ。向こうでは空き地だった場所だな」

可視化されたメニューウィンドウのマップを指差しながら悠が言う。断じてダジャレじゃないぞ。

「にしても不思議な気分だ」

親指と人差し指をくっ付けてから離す。すると2本の指の間から半透明のウィンドウが出現する。これがメニューウィンドウだ。

「他は現実と代わりないのにな。ま、現実とゲームを一緒にしないようにするためか」

「ここは現実に近すぎる。区別するための基準も必要だろう。」

「も、もう決まった?」

玄関から隼斗がこちらを見ている。残念ではあるが無事だったようだ。

「なんか失礼なこと考えてない!？」

鋭いな。

「んなこと無いぞ。さ、出発だ」

手をヒラヒラさせながら玄関を出た。

NPG スタートダッシュ

「ここだな」

ギルドホームの前に立ち眩く。すぐ近くでは女性NPCが『初心者
はここ!』という看板を持って立っている。NPCの意味あるか?
「さつさと行くぞ」

未だ不機嫌な美紀がズンズン進んでいく。

「お、おう」

多少の引け目を感じているのか、文弥が恐々としながら着いていく。

「あはは…。さつ、いこ〜」

鏡花も達哉の腕を引っ張りながら建物の中に入っていった。

このゲームの中では初心者向けの、いわゆる『チュートリアル』がある。どれもこれも超簡単なものばかりだそうだ。

俺たちが最初に受注したのは『討伐 1 トカゲの被害』。1つ目はクエストの種類、他にも採取や護衛がある。2つ目はクエストの難易度だ1〜10までで、自分に合った難易度を選ぶ。今回はもちろん1だ。

「さつさとして終わらせましょ」

終始美紀が恐かった。

この世界の中では向こうと違って都市の外に出ることが出来る。現実では分厚い壁のある場所には、ゲーム内では簡素な門だけになっている。目的地は『初戦の森』。これまたそのまんまな名前だ。

初戦の森はすぐその西門から5分、たいては時間がかからない。

初戦の森

『討伐目標 リザードマン5体、サラマンダー5体です』

クエストの詳細を確認しながら森に入る。

「おーい、もう準備しとけよ」

椿にたしなめられる。ちなみに椿は既に臨戦態勢だ。「ん、そうだな」

腰に吊ってあった愛刀「氷凰」の柄を握る。

ガサガサガサッ

「!？」

近くの茂みが揺れる。標的が現れたのかと注視していると…

「う、いったく。チクチクするうく」

半ば涙目になった瑠美が姿を現した。

昔と今じゃ大違い（後書き）

今回は昔話が多かったですね

危うくゲーム世界が書けなくなる所でした

次回はバトルになる予定です（まだ一文字も書いてないけど）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8750y/>

ブルー・アイリス

2011年12月24日10時48分発行